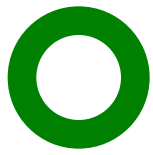


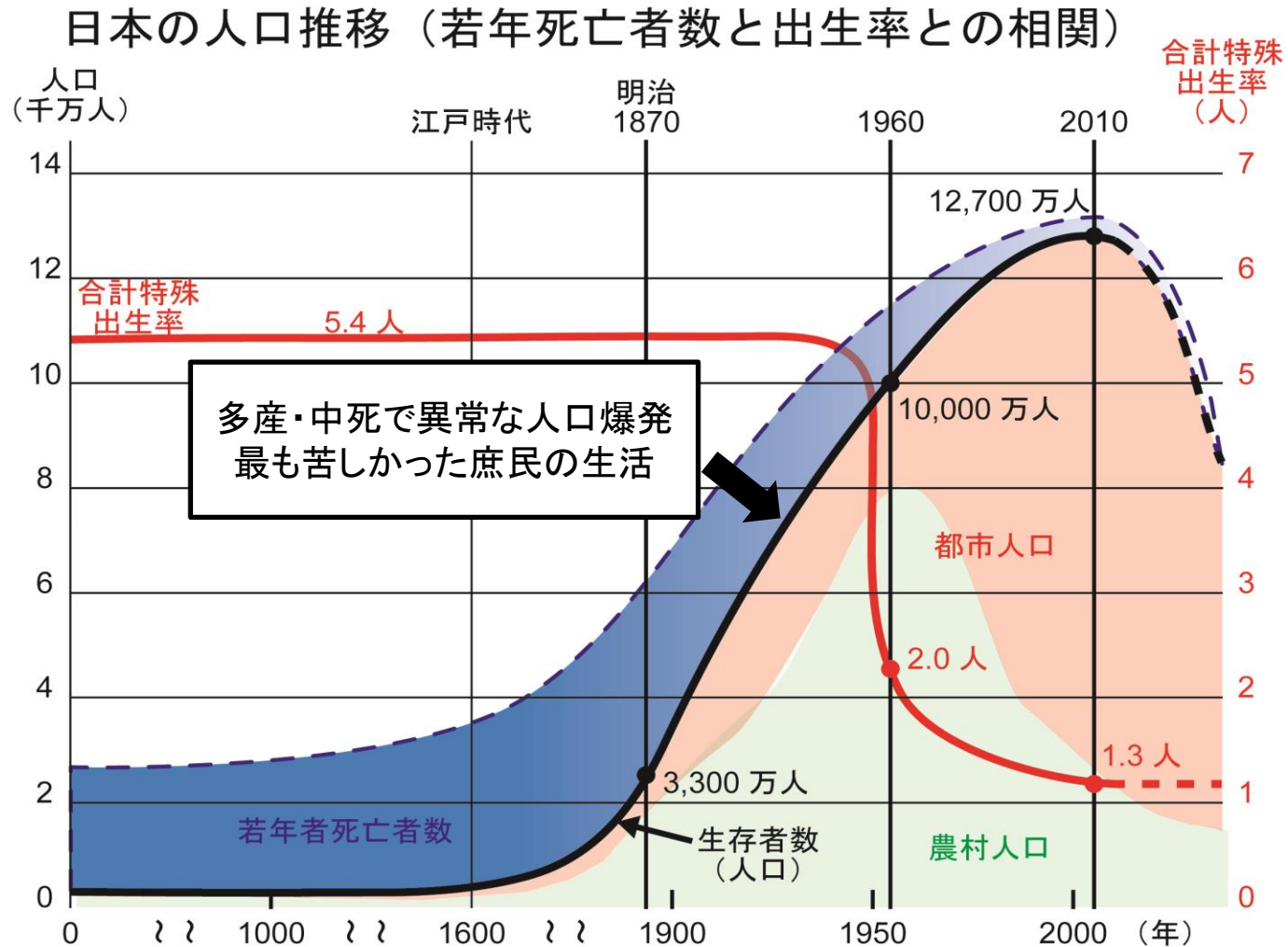
村研地域シンポジウム 資料編
『農村の地域づくりの観点と方法—T型集落点検を通じて—』

熊本大学 徳野貞雄



1. 日本の人口推移と出生率

【人口減少は、悪い事ですか？】





2. 人口ピラミッドの変化

「高齢化社会は、悪い社会ですか？」

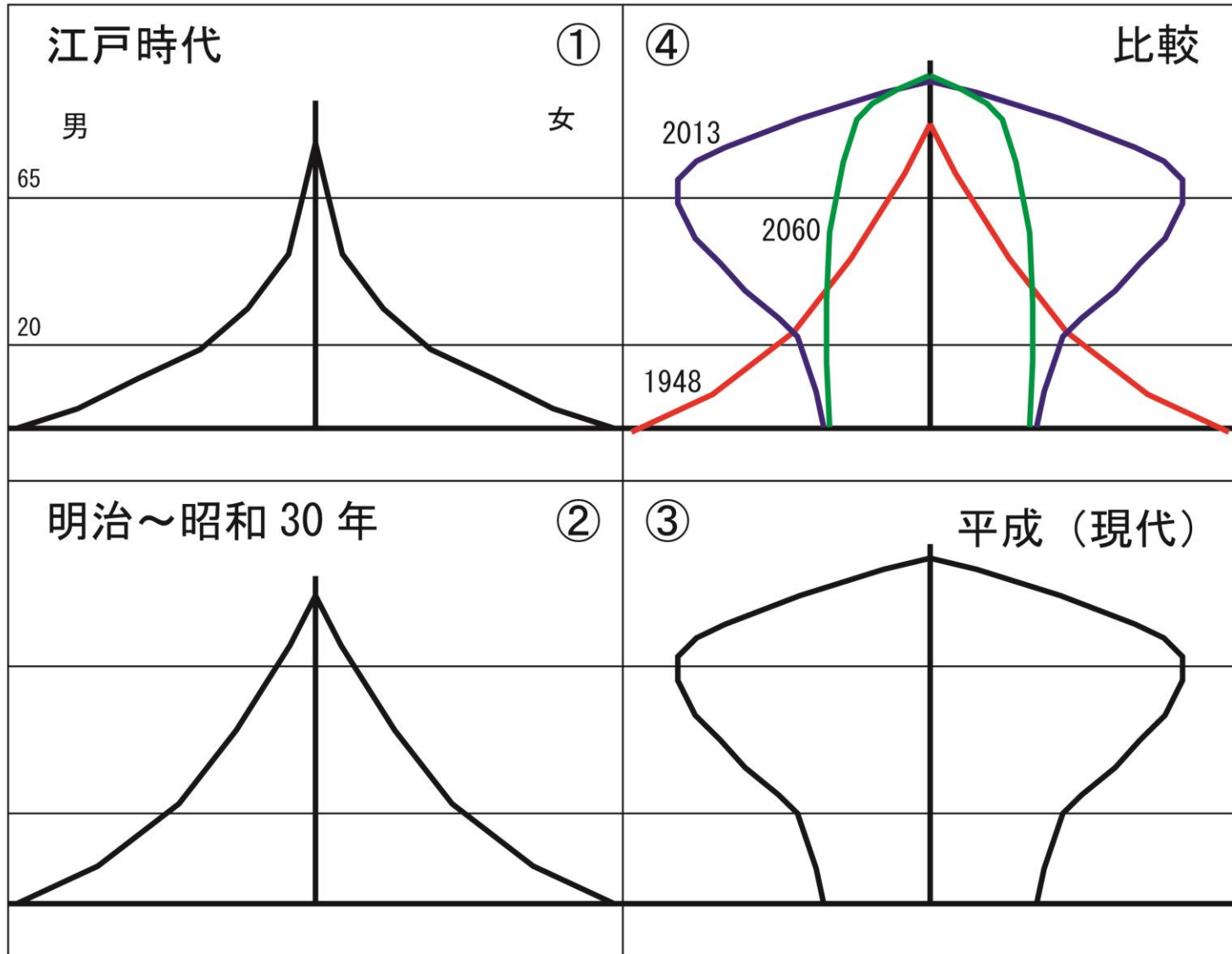


表3 地方社会における地域課題の歴史的変化

	～明治期	大正・昭和前期	昭和後期 1960	平成(現代)
人口	微増	激増	出生率の激減と 長寿化の複合態	激減
産業・経済	農業	農業(軽工業化)	工業化・商業化 高度経済成長	第3次産業化 成熟経済
家族の継承と変化	長子相続 伝統的「イエ」	次・三男の流失 「イエ」は存続	若壮年壮層の 全般的流動化	「世帯」と「家族」 の分離、単身化
生活圏 移動手段	狭・閉鎖的 徒歩	マチ・ムラ連合 徒歩・バス鉄道	都市化・過疎化 車社会化	広域化・開放的 車社会
地域課題	食料増産 家族の自給	人口激増による 食料危機と確保	所得向上(雇用) 貨幣経済の浸透	地域社会の統合 生活の安心安定



4 「農山村はもうダメ」の大合唱 — 「社会的限界集落」論の嵐 —

- a. 人口減少
- a. 少子高齢化
- a. 担い手不足
- a. 農林業の衰退
- a. 雇用の場がない
- a. 交通が不便

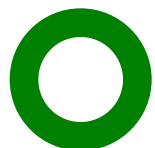


「社会的限界集落」
(マスコミ・行政・研究者の
ラベリングによって形成)



集落消滅への危機感

(リーダー程、「限界集落」をよく使う)



5. 変容する「ムラ」の分析枠組み

a. 昭和30年・40年代を原型とした「ムラ」の統計と現代の「ムラ」を外型的に比較することの盲点

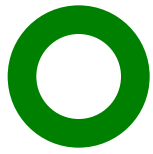
	人口 年齢構成	世帯数 類型	学童数	農業経営	他出子 の状況	複業 雇用	年金	車と 移動	通信 インフラ	生活圏
昭和30・40年	○	○	○	○						
現在	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

既存の(限界集落的)な比較分析では、
現在の農山村住民の暮らしと集落の将来は把握できない

出生率、平均寿命、貨幣経済の浸透、世帯類型、他出子、交通手段
農業から雇用へ(就職)、TV、コンビニ etc. の出現と生活変化を無視



生活内容・範囲の変化



6. 社会構造・生活構造・パーソナル構造の相互連関

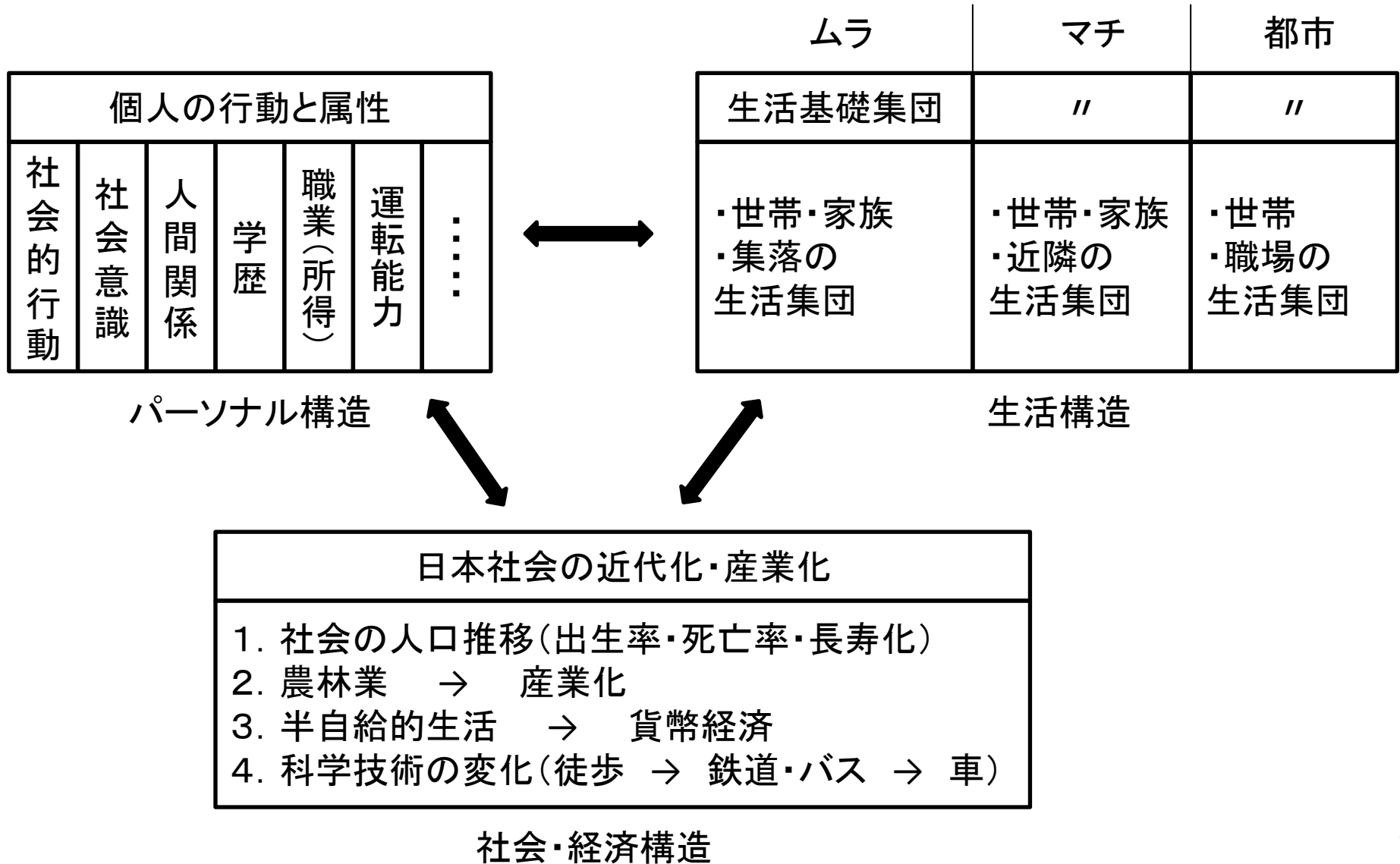


表7 過疎地の在村者の人口ピラミッド (K 集落の例)

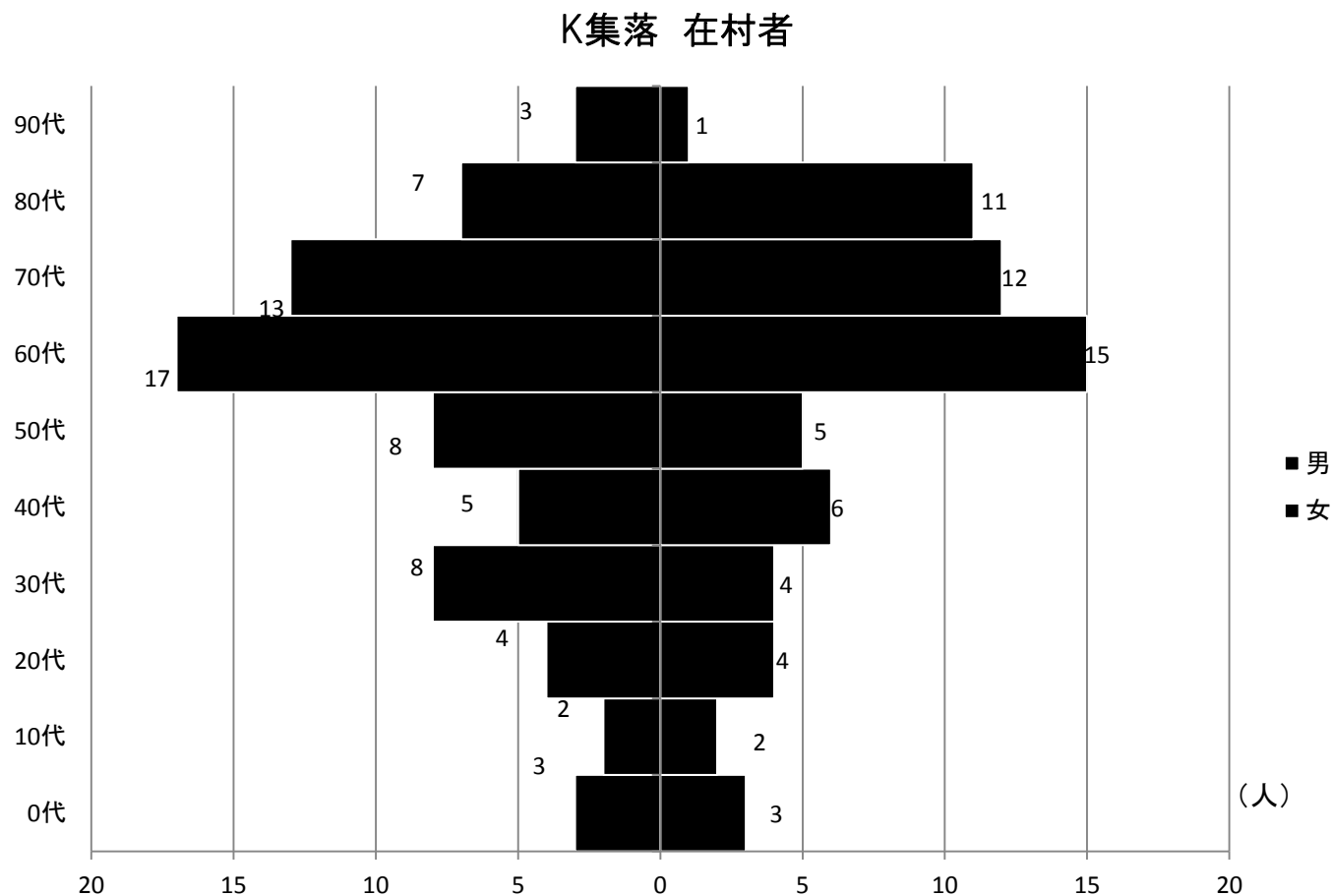
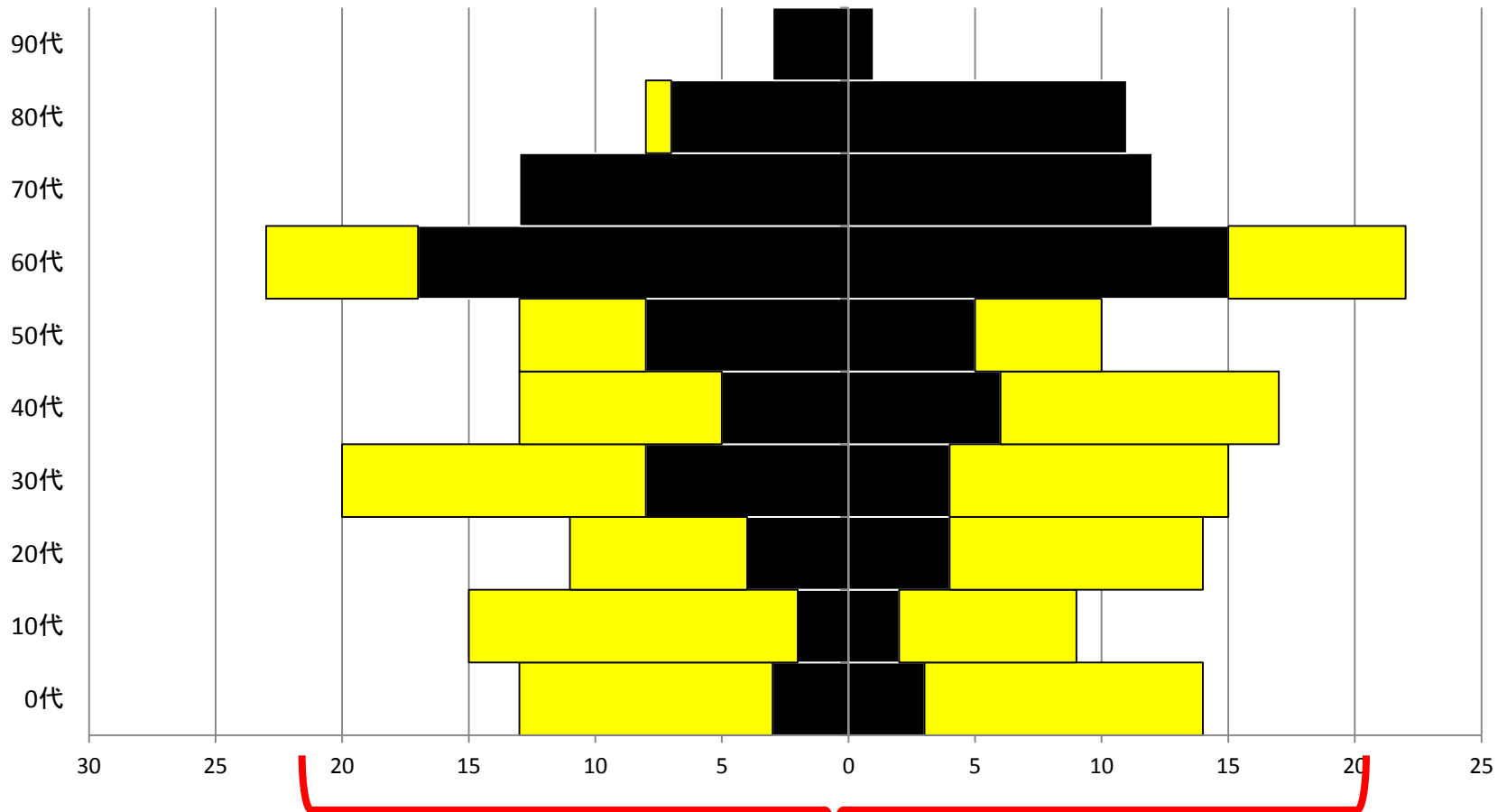


表8 近隣他出者を含めた 人口ピラミッド (K集落の例)

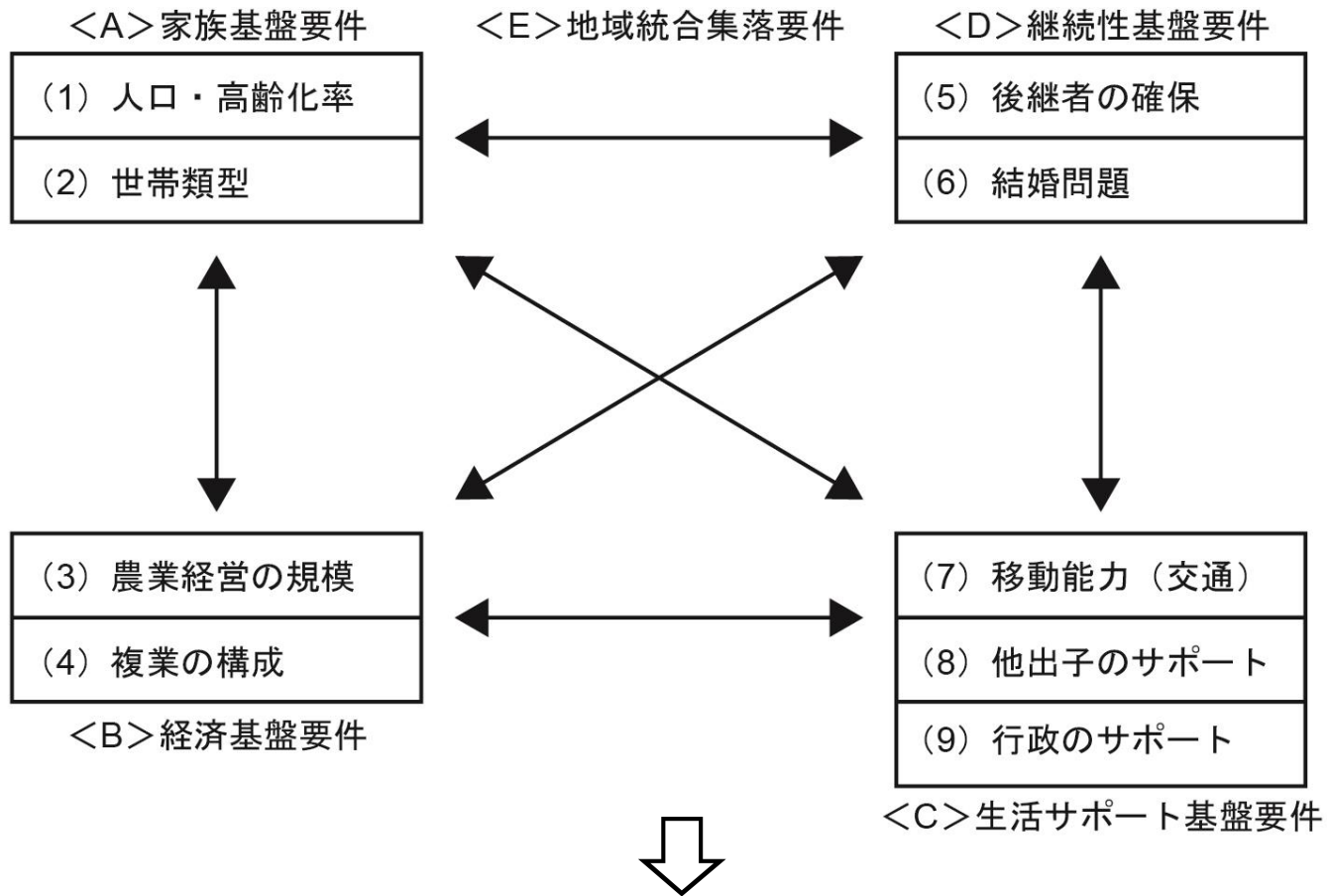
在村者 + 近隣他出者



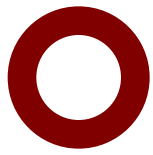
ここに生活範囲がある



9. 生活構造の維持・存続要件分析図

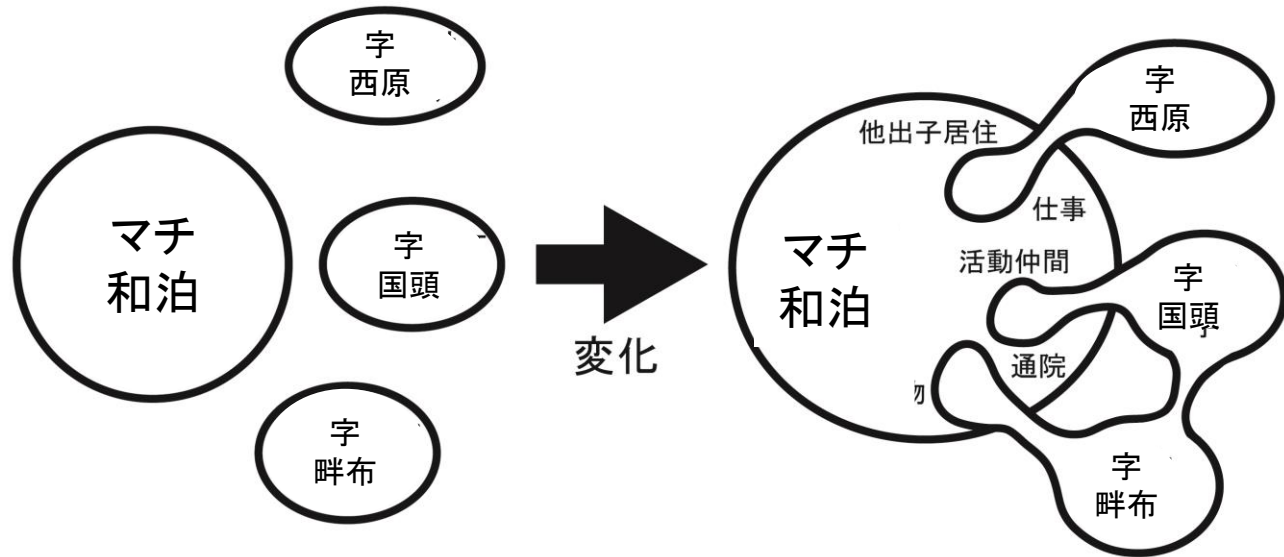


【家族・集落の診断】



10. 変容するムラとマチ (現代的マチ・ムラ連合)

変容するムラ（集落）の概念図

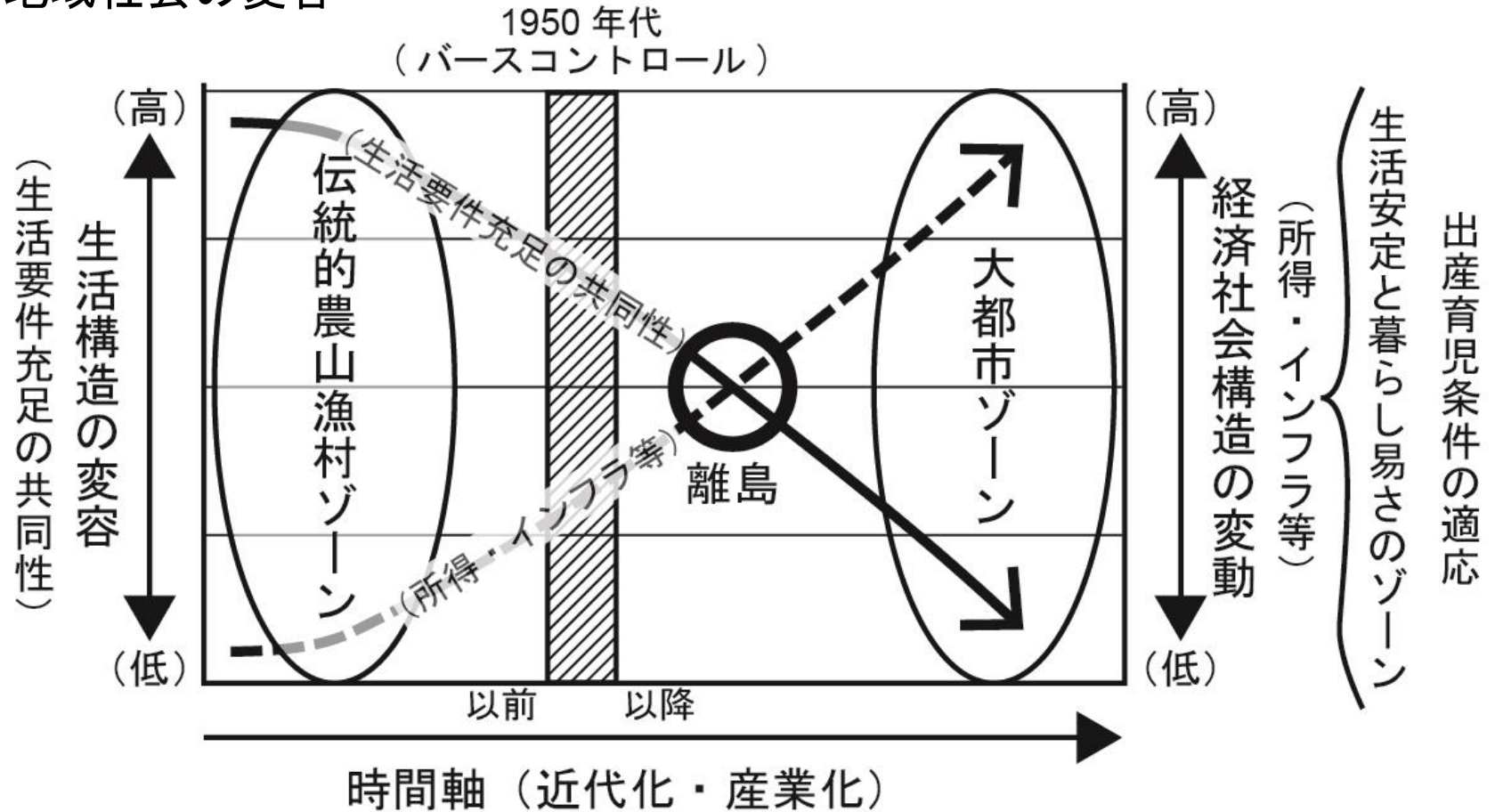


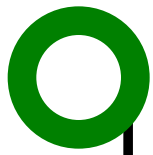
[自己完結型集落構造]

[修正拡大集落構造]
(新マチ・ムラ連合型地域社会)
日帰り集落と生活圏の拡大

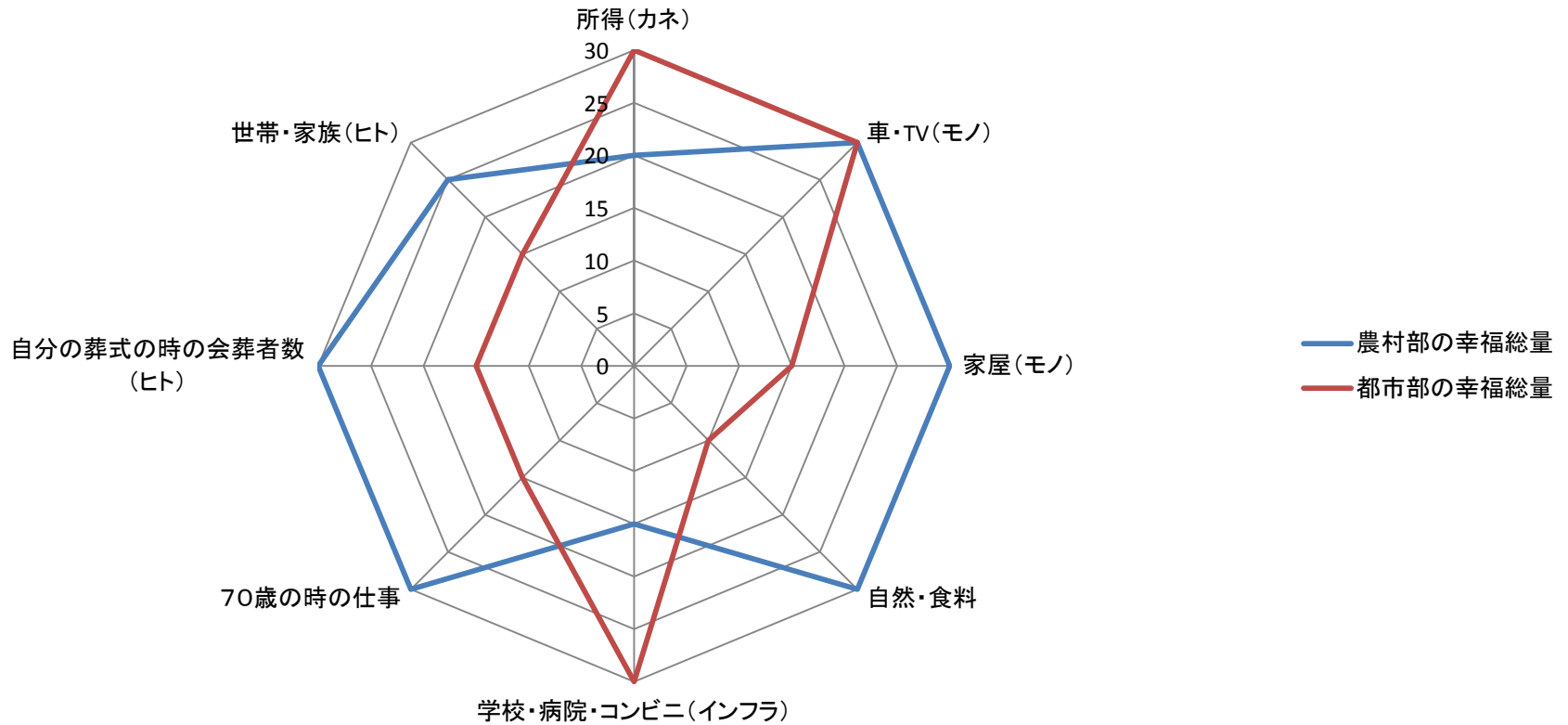
1 1 . 地域社会の変容と目指すべきモデル

地域社会の変容





2. 生活要件充足(幸せ)の社会指標





今、農山村に吹く風



1. ステレオタイプのな 「農山村はダメ」の大合唱

- a. 人口減少
- a. 少子高齢化
- a. 担い手不足
- a. 農林業の衰退
- a. 雇用の場がない
- a. 交通が不便



「限界集落」



消滅集落化

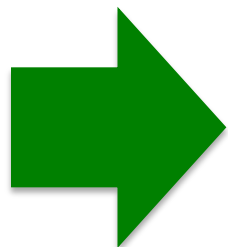
(リーダー程、「限界集落」をよく使う)



2. 「限界集落」論への批判(その2)

対策としての「限界集落」

- a. 本当に自分たちの暮らしが「限界なのか？」
(明日から暮らしていけないか?)
- b. 行政や都市農村交流などの外部依存が目立つ
(極端に言えば、「もうダメだから助けて下さい」)
- c. 地域住民が、自分達で何をするのかが欠落している



今日は、住民(皆様方)が具体的に何をしたらいいのかを、生活の維持・存続を軸に見直してみる。



3. 変容する「ムラ」(その1)

a. 昭和30年・40年代を原型とした「ムラ」の統計と現代の「ムラ」を外型的に比較することの盲点

	人口 年齢構成	世帯数 類型	学童数	農業経営	他出子 の状況	複業 雇用	年金	車と 移動	通信 インフラ	生活圏
昭和30・40年	○	○	○	○						
現在	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

既存の(限界集落的)な比較分析では、
現在の農山村住民の暮らしと集落の将来は把握できない

出生率、平均寿命、貨幣経済の浸透、世帯類型、他出子、交通手段
農業から雇用へ(就職)、TV、コンビニ etc. の出現と生活変化

 生活水準・内容の変化



4生活指標の現代的変容(具体例)

1、人口減少は本当に社会的マイナスなのか？

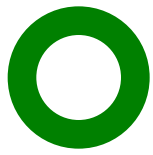
[人口増加した大正・昭和初期が、生活者に最も苦しかった。
貴方の兄弟は、何人ですか。何人子供を産みましたか？]

2、高齢化社会は、人類の願望の到達点

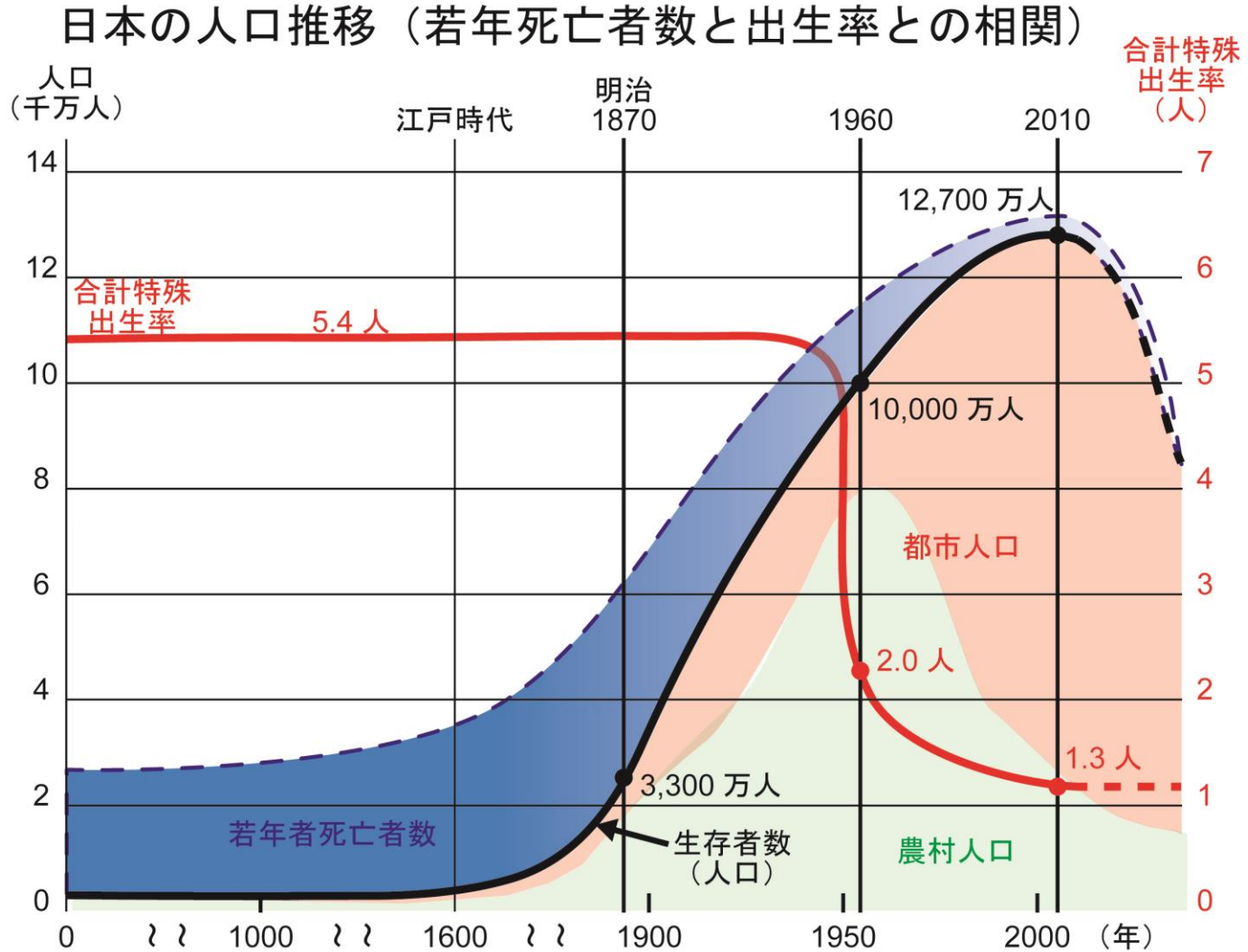
「高齢者医療費・年金問題等は、経済的視点からの偏向—
70歳代・80歳代の自分の祖父・母に、死ねと言いますか」

3、現在の農山村は、自動車社会で交通の便は良好・・・

「現代の、公共交通機関は自家用車である」



5 日本の人口推移と出生率

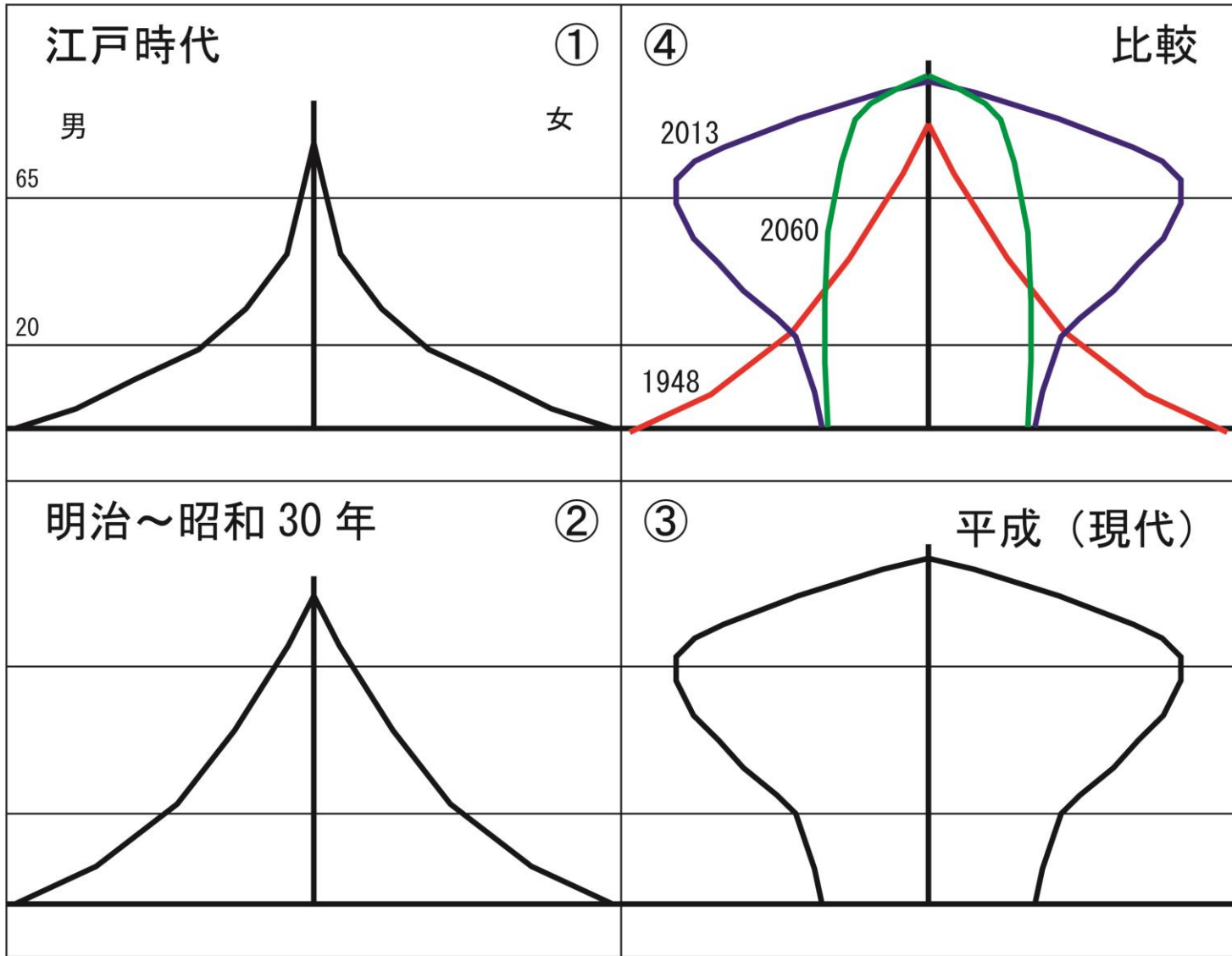


日本の人口推移の特徴

- 1、日本の合計特殊出生率は、有史～終戦直後までバースコントロールが出来ないため、5人以上の非常に高い出生率を続けてきた。ただ、江戸期まで死亡率も高く、人口は微増。(生・死は、神の領域。兄弟が死んだから、生き延びれた時代)
- 2、明治以降、黴菌等の発見により、消化器関係の死亡率が急速に低下する中で、人口の急激な増加をもたらした。
- 3、それ故、大正・昭和初期の庶民の暮らしは、「子だくさん」の中で、非常に苦労した「生き難い時代」。



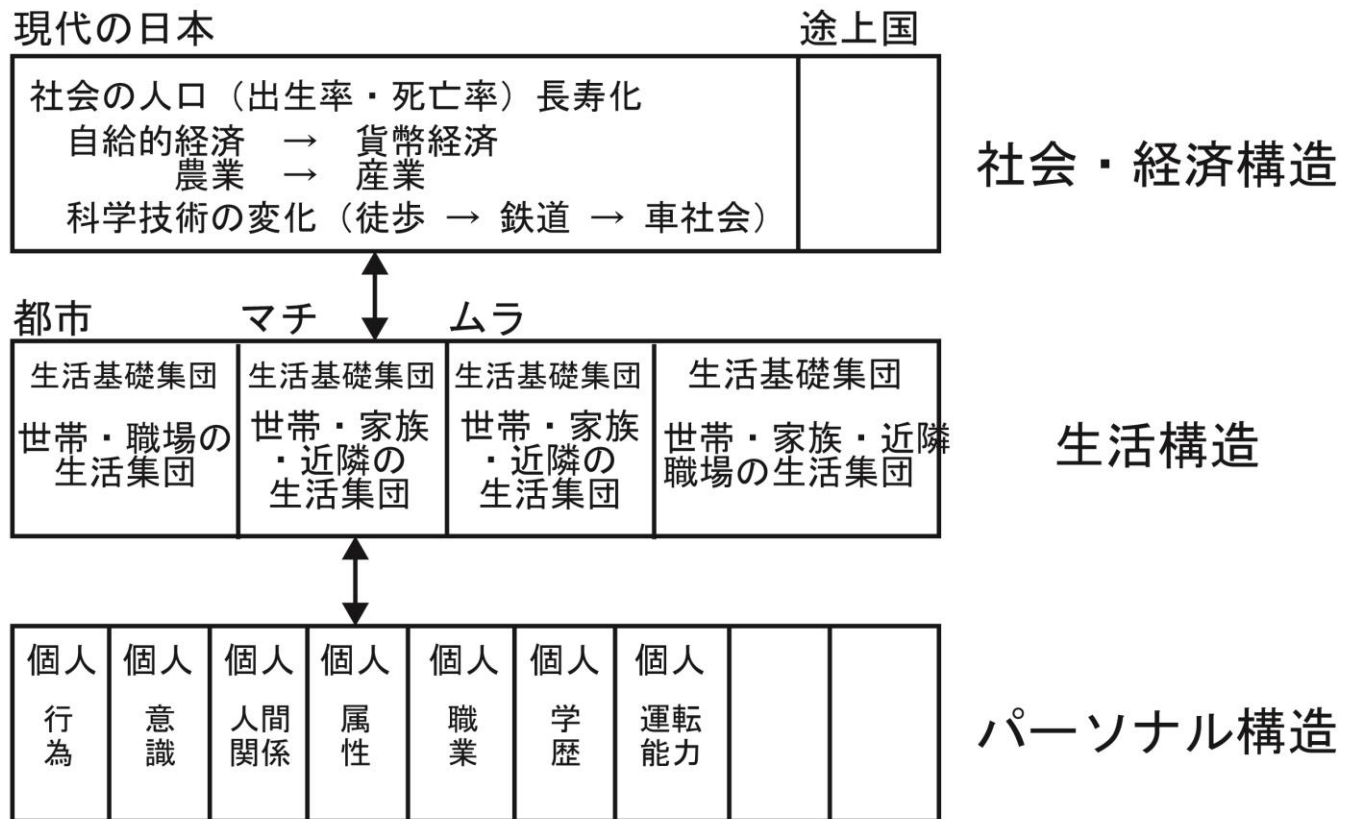
6 人口ピラミッドの変化





7 社会構造・生活構造・パーソナル構造

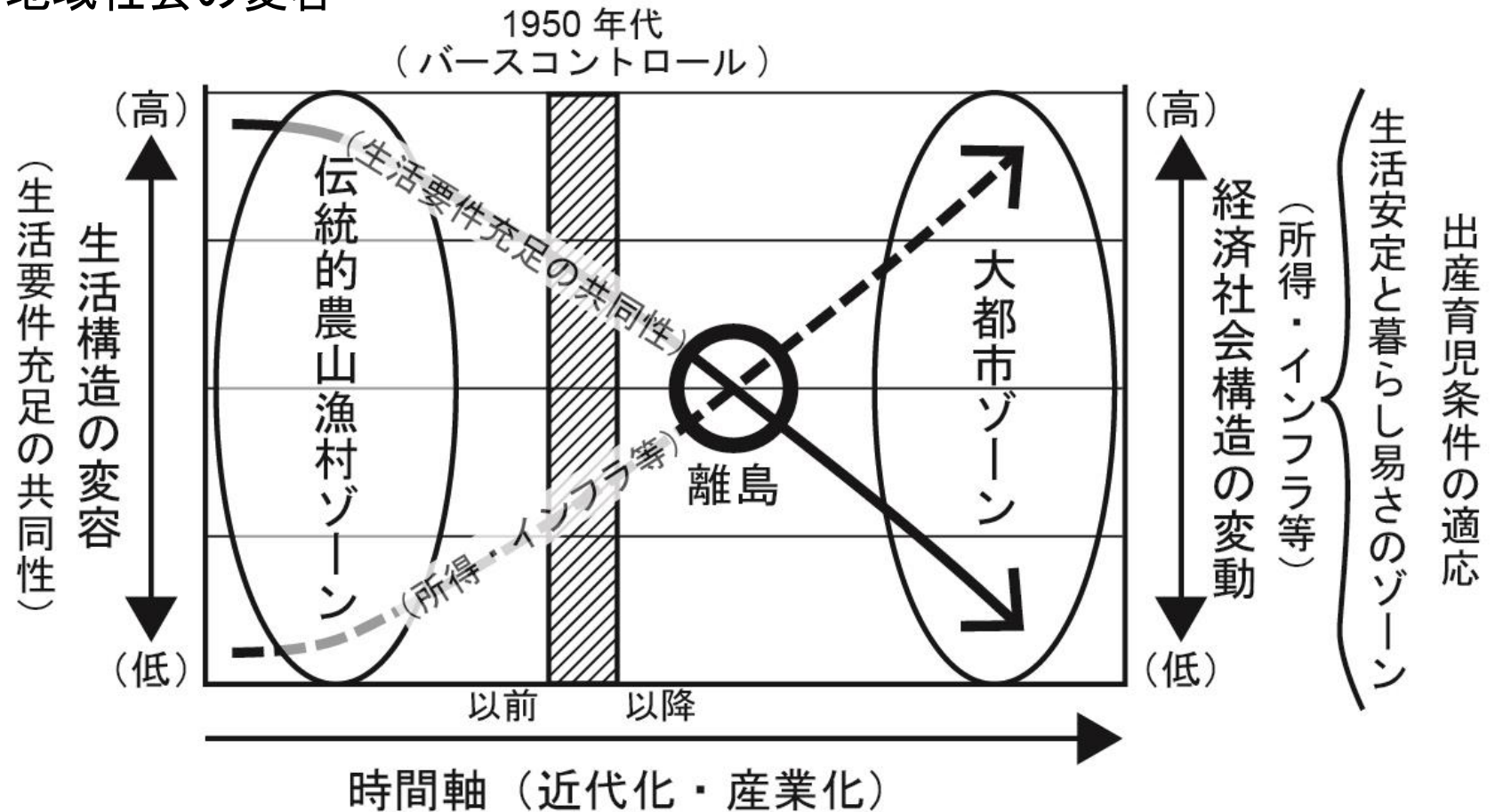
生活構造論から見た社会の三重枠組

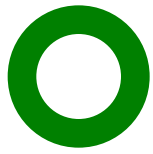




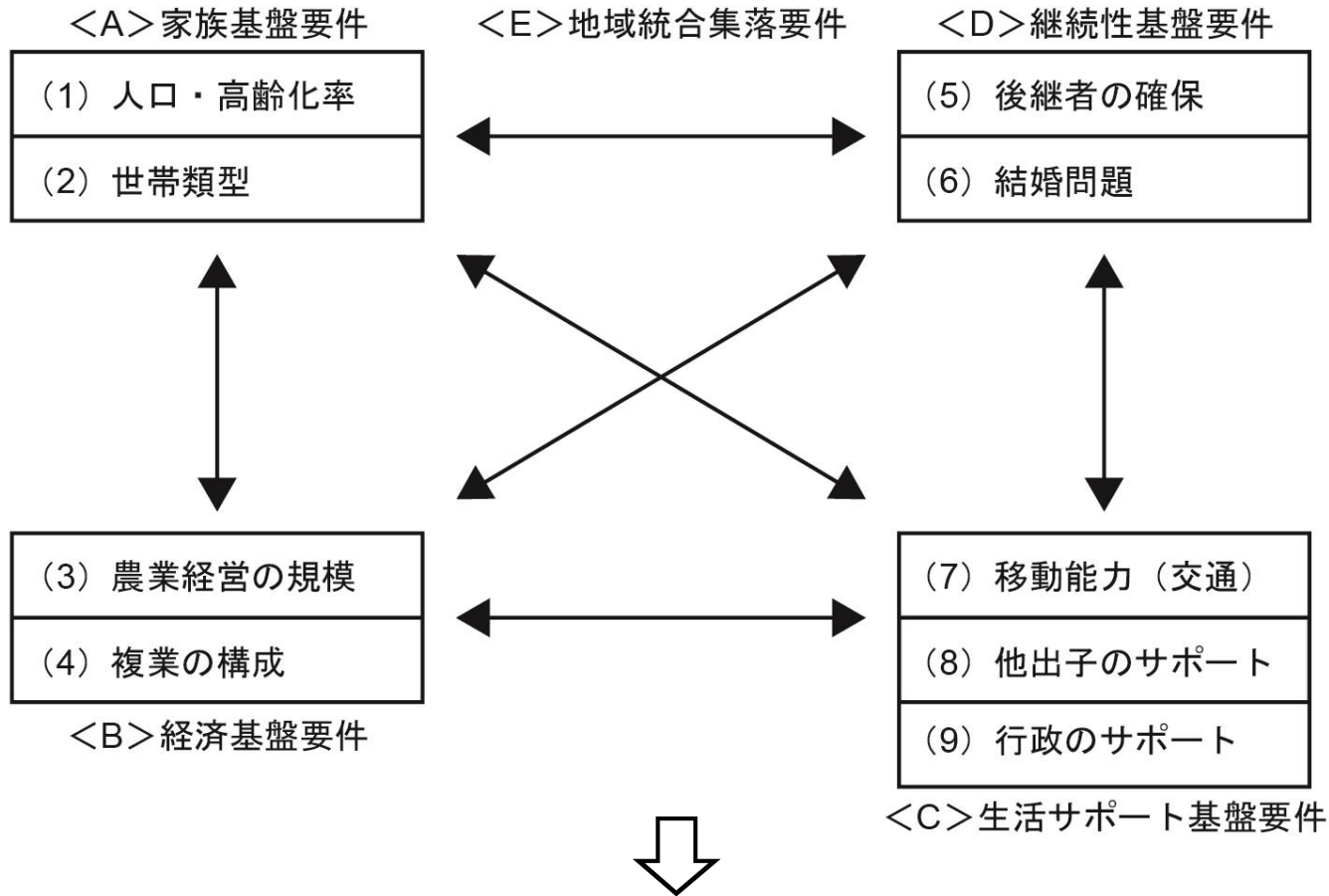
地域社会の変容

地域社会の変容





生活構造の維持・存続要件分析図



【家族・集落の診断】



生活要件充足(幸せ)の社会指標

